

(エ) 論文要旨

論文要旨
申請者氏名 孫 向宇
申請学位 博士
主論文題目
「～（さ）せていただく」の使用と社会的容認度に関する研究
主論文要旨 邦文は4,000字以内 外国語は2,000語以内
「～（さ）せていただく」は本来、「「どうしてもよい」という恩恵／許可を得て何かを「させてもらおう」ことを、恩恵／許可の与え手を高めて述べる」（菊地 1997）という場合に使われるのが基本だが、近年、恩恵／許可の与え手が実際に存在しない場面にまで使用が拡大している。ただし、拡大用法の使用に対して肯定的な見方（菊地 1994、菊地 1997、米澤 2001）と否定的な見方（滝浦 2016）が併存するのが現状で、日本語教育の現場において拡大用法の取り扱いを巡って共通理解を得るには至っていない。また、拡大用法の使用意図も明らかにされていない点が多い。
一方、外国人日本語学習者による「～（さ）せていただく」の誤用に関する指摘も見られるが、学習者の使用実態が明らかにされておらず、その使用が「～（さ）せていただく」に係る教育経験にどのように影響されているのかなど、日本語教育の現場においても未だに解決されていない点が多い。

そこで本研究では、「～（さ）せていただく」の使用において日本語母語話者に見られる諸問
題を検討したのち、外国人日本語学習者の使用状況との対照研究も行い、学習者の使用上の問題
が生じた理由及びその解決策を探ることにした。
本研究は 10 章からなる。各章の概要を以下に示す。
第 1 章では、本研究の背景、目的、研究対象、研究方法といった基本事項について述べた。そ
の後、本論文の構成及び各章の概要について記した。
第 2 章では、「～（さ）せていただく」に関連する先行研究を「用法に関する研究」、「使用動
機及び使用効果に関する研究」、「外国人日本語学習者の使用に関する研究」に分類し、類別に考
察を行った。その結果、先行研究には「拡大用法をもれなく包含した分類法が確立されていない」、
「各用法の容認度が明らかにされていない」、「日本語母語話者による拡大用法の使用動機が十分
に究明されていない」、「日本語学習者の使用上の特徴が明らかにされていない」という 4 つの間
題点が存在することが分かり、これらの問題点を本研究の課題とした。
第 3 章～第 6 章では母語話者の「～（さ）せていただく」使用について論じた。第 3 章では、
「拡大用法をもれなく包含した分類法が確立されていない」という問題を解決すべく、「～（さ）
せていただく」の用法の新たな分類法を検討した。まず、「～（さ）せていただく」の基本的な
用法に対する先行研究の定義を分析し、その中から「許可の受け手」「許可」「恩恵」「敬意」の
4 つの要素を抽出した。これにより、基本用法を「「許可の受け手」「許可」「恩恵」「敬意」の 4
つの要素をすべて有するもの」と規定した。次に、「～（さ）せていただく」の拡大用法に対す
る先行研究の分類法を考察し、拡大用法の実質が「「許可」及び「恩恵」の 2 要素の希薄化また
は欠落に起因する使用範囲の拡大により生じた用法」であることを指摘した。これに基づき、「恩
恵」・「許可」の有無及び「許可」の性質（実在か、形式上か）により、拡大用法をⅠ～Ⅴの 5 タ
イプに分類した。最後に、「恩恵」の有無を判断する基準についても論じた。
第 4 章では、『青空文庫』を用いて、1870 年～1960 年の 90 年間における「～（さ）せていた
だく」の各用法の使用状況を実例を挙げながら考察した。その結果、拡大用法Ⅲの用例が 1890

年代に初めて現れ、その後の使用の歴史も長いことと、使用回数が常に基本用法を上回っている
ことが分かった。また、基本用法と拡大用法Ⅲの用例数が全用例の 8 割以上を占めることも分か
った。これらのことから、「～（さ）せていただく」の基本用法が縮小し、それに対して拡大用
法、特に自己宣言する用法が主流になりつつある」という先行研究の議論に対して、本稿では、
拡大用法Ⅲが現れた時期から、基本用法と拡大用法Ⅲが「～（さ）せていただく」の用法の 2 本
柱になっていると捉えた方が妥当であることを論じた。
第 5 章では、「各用法の容認度が明らかにされていない」という問題を解決すべく、2020 年時
点の「～（さ）せていただく」の各用法の社会的容認度をアンケート調査を基に考察した。その
結果、社会的容認度が、拡大用法Ⅲ＞基本用法＞拡大用法Ⅱ＞拡大用法Ⅳ＞拡大用法Ⅴの順であ
ることが分かった。これにより、本稿では、基本用法と拡大用法Ⅲを「容認範囲内の用法」、拡
大用法Ⅱを「許容範囲の境界線上にある用法」、拡大用法ⅣとⅤを「許容範囲外の用法」として
捉えることにした。また、拡大用法Ⅴに対する容認度における世代間の差異が認められ、比較的
新しい用法への中高齢層の抵抗感の存在が示唆された。さらに、基本用法に対する容認度の男
女差については、男女の敬語意識の相違などの理由が考えられるが、明確な説明項を立てるため
には、更なる調査が必要であることから、今後の検討課題とした。
本章ではまた、「～（さ）せていただく」の社会的容認度に影響する要素についても検討した。
その結果、許可の有無、及び使用回数と容認度の間において相関関係の存在が認められたことか
ら、使用回数が容認度に影響するプロセスについても検討した。
本章の最後では、クラスター分析を通して、日本語母語話者の容認の類型を明らかにした。そ
の結果、「用法区分型」、「容認傾向型」、「非容認型」の 3 クラスターが存在することと、「用法区
分型」が多数派であることが分かった。
第 6 章では、言語景観及び国会委員会における「～（さ）せていただく」の使用例を観察し、
使用動機を検討した。その結果、言語景観における「～（さ）せていただく」の使用には、「好
ましい状況」、「好ましくない状況」、「どちらでもない状況」の三種類の場面があり、いずれも予

想を超える事態が起きた場面にのみ使用されることが分かった。また、「好ましくない状況」で
の使用例が全用例の7割と最も多く、その理由について本稿では、好ましくない状況における話
し手の心理的負担が最も大きく、「～（さ）せていただく」には話し手の心理的負担を軽減する
効果があるため多用されることを論じた。「好ましい状況」および「どちらでもない状況」にお
ける使用動機は、それぞれ「恩着せがましさの回避」と「強い立場のアピール」であった。また、
国会委員会での使用動機について本稿では、①「～（さ）せていただく」の使用により場面の改
まり度が上がり、前の発言者によって基準化されたその場の改まり度を承認し維持するための使
用と、②前の発言者が「～（さ）せていただく」を使うのに伴い、後に発言する者も「当該表現
る」ことを宣明するための使用、の2点にまとめた。
また、使用動機と使用効果の間に存在する「ずれ」については、本章ではその原因を「許可者
の明示性」、「聞き手における選択する権利の消滅」、「表現自体の音韻的長さ」の3方面から論じ
た。
第7章～第9章では、日本語学習者の使用に関わる諸問題を検討した。第7章では、「日本語
学習者の使用実態が明らかにされていない」という問題を解決すべく、「日本語学習者会話デー
タベース」及び「KY コーパス」を用いて、「～（さ）せていただく」についての学習者の使用状
況を考察した。その結果、先行研究で指摘されている語用論的な誤りによる誤用は見られなかつ
た一方、「～ていただく」との混同が多発していることが分かった。また、本章ではアンケート
調査を通して、学習者の使用意識には母語話者の容認度と同様のクラスターが存在することや、
用法別の使用意識と容認度には同様の傾向（拡大用法Ⅲ＞基本用法＞拡大用法Ⅱ＞拡大用法Ⅳ＞
拡大用法Ⅴ）が存在することを示し、学習者の使用意識と母語話者の容認度には類似性があるこ
とを確認した。しかしその一方で、学習者の使用状況には、基本用法に対して使用意識が低下す
ることや、全用法に非容認的態度を示回答者が比較的多いことなど、母語話者の容認度との相違
も確認された。
第8章では、日本語教科書での「～（さ）せていただく」表現の取り扱い状況を考察した。そ

の結果、総合教科書では、20 冊のうち、「～（さ）せていただく」表現を取り上げているのは約
3 割の 7 冊にとどまり、その内容も基本用法に関するもののみであり、拡大用法Ⅲの使用回数が
最も多いという現状が総合教科書にほとんど反映されていないことが分かった。その一方で、ビ
ジネス用教科書の約 7 割では拡大用法に関する説明が確認でき、本章ではその理由について「拡
大用法が「ビジネス敬語」としてのイメージが強いため」であることを論じた。
本章ではまた、学習者が受けた「～（さ）せていただく」の説明に関する聞き取り調査を行っ
た。その結果、説明内容に 4 つのパターンが存在することが分かり、また、拡大用法に対する説
明では拡大用法の類型、機能や使用効果、過剰使用の危険性などにほとんど触れられておらず、
不十分な点が多く残されていることも分かった。
第 9 章では、日本語教育における「～（さ）せていただく」のあるべき姿を検討した。この章
ではまず、「日本語教育文法は日本語記述文法とは独立に設計しなければならない」という庵（20
10）の提起した「無標・有標」の対立概念を取り入れ、「～（さ）せていただく」の「使用場面」
と「人間関係」に着目して、3 種類の用法に分類した。
本章ではまた、「～（さ）せていただく」の各用法の学習の必要性及び学習のタイミングにつ
いて検討した。その結果、現段階では学習が必要なのは基本用法と拡大用法Ⅲであり、学習のタ
イミングについては、それぞれ初級後期と中級以降で学習するのが適切であることを論じた。そ
れ以外の用法（拡大用法Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ）については、現状では容認度が低いため、学習項目として取
り上げる必要性に乏しく、教授する場合は理解知識の範囲内に止め、拡大用法Ⅲと同時に提示し
たうえで、使用場面の違いや現時点では容認度が低いことなどを学習者に伝えることが重要であ
ることを述べた。
本章の最後では、「～（さ）せていただく」の使用効果をプラスとマイナスの両面から教授す
ることの重要性を論じた。

